

はじめに

紀平英作

人文科学は学ぶ一人一人の息づかいがもっとも色濃くでる学問の一つであろう。そうであれば、やや迂遠だが、学ぶことの意味を考えることからはじめてみたい。われわれがいま目指す人文科学とはどのようなものか。その問題を考えるために。

学ぶ行為の積み重ねが「学問」という体系的な枠組みにいずれは集約されるとしても、人文科学にせよ他の領域にせよ、学ぶ日々の営みは、およそなに物かに突き動かされるような唯々ひたむきなものである。その営みは、自己の知識の至らなさ、あるいはその及ぶ限界を顧みていく、内と外に向けての強い自省から始まるからである。自らの不明あるいは境界性を自覚し、既知への問い直し、あるいはそれまでの知識を再構成しようとするもどかしいほどの思いが、学ぶものにとって一日一日の積み重ねを生み出す。学ぶ行為が生命力をもつのは、自己を含めて現状を見つめ直そうとするそうした主体の眼差しが、彼の生き方あるいは生の意味づけにも溶け込むことによって、挫折や忍耐を乗り越える強い動機づけを与えることによる。

他方、既存の知識をそのように問い直し、さらには人間の有限の範囲を一步でも押し広げてみようとするものは、やはり人文科学にせよ他の分野にせよ、学ぶ過程で自省に循環的に立ち戻る作業を繰り返すなかで、多くの場合、思考の上においても独自の方法を選ぼうとする。われわれが歴史経験的に積み上げてきた学ぶ上の最も実りある思索のあり方とは、たえず実験的である姿勢とってよい。

およそ学ぶものはやみくもに走り出すわけにはいかない。何かの指針をもって一步を踏み出す。いまその指針をかりに指定すれば、「合理的な態度」という他ない。ただし、その種の「態度」を頭に刻みこむにしても、いずれにせよ歩き出した後は、予断を排して自由に新しい実験を繰り返す心のあり方、さらには忍耐強く試行錯誤する努力のなかから、学ぶ行為は、創造的な知的活動へと結びつく可能性を高めていくに違いない。

学ぶ行為、とくにそれがはらむ動機づけと行動の特性を以上のように考えれば、学ぶ行為の集約である学問とは、人間にとってどのような文化的営みであり、また社会的行為となるのか。学問と社会との関係を総合的に論じることはいま手に余る問題ではあるが、とりあえず、学問が既成の知識や現実に対する繰り返しの問いかけ、広い意味での現状に対する「批判」を基礎として始まるということだけは、上述の理解から明言できるであろう。いかに強固に見えても変化することをやめない社会、さらには人間の生き様。そうした社会の構造、出来事、あるいは人間という存在の意味またその活動に関わって、生きることを意味を繰り返し問い直すことは、つまるところ人が、自己や周囲への持続的な感受性なくしては生きえないということでもある。その生きることを意味をたえず問おうとする人間の根元的感受性と、もっとも深く結びつく文化的行為が、人文科学という学問であろう。

しかし、そこまで考えいたったとき、学ぶうえでもっとも難しく感じる問題は、その批判的問いかけを発する力をわれわれ自身がいかにして自らの内に能動的に生み出すのか、さらには一人一人維持していくか、という点である。古来、人間は様々な必要から「学ん」できた。現在もまた学ばずには人間は生きられない。しかし、われわれが今なお「学び」続けるとすれば、それはどのような態度のものであろうとするのか。そのことが、今日の世界における人文科学の意義に深く結びつくであろう。私はその態度をあえて「合理的な態度」と考えようと思っている。

その「態度」を、「合理的」という字義に力点を置いていまい少し詰めて考えてみたい。

実際のところ、「合理的なるもの」の基準は、時代また人によって、間違いなく変化していく。たとえば極端な一例だが、人間の身体的差別を「合理的」区分ととらえていた近世までの思想から、法の前での人間の平等を合理とする人権宣言以降の議論へと、人間の社会的位置づけに関し規範化された「合理的なるものの」の基準は、過去250年間、近代を通して一八〇度の価値転換さえ示した。その事實は、「合理性」の基準が、歴史的時間と環境につねに制約される存在でしかありえなかったことを示している。

いわば時代と文化的制約を免れ得ない「合理性」をあたかも「普遍的合理」と主張するとき、合理性を強引に唱道する議論は、それ自体が狂気に変質する危険を強く含む。近現代の歴史はそのような狂気に満ちている。「合理」という言葉を使うとき、われわれがもっとも注意しなければならない隘路もそこにある。しかし、その種の「頑迷」と表裏になりやすい「合理性」をたえず回避することを心がけた上で、近代以来の「合理的な態度」としてわれわれが発展させてよいのは、現状をつねに見直し考え直してみると共に、とくに自己の語る合理＝「理性」をも疑ってみようとする、19世紀末には明確に登場してくる精神である。

自らの生き方、知識のありようを含めて既存規範とそれを支える知識を問い直そうとする態度は、歴史的には「批判的精神」と呼ばれた、神に対して人間理性をより強く主張しはじめるルネッサンス以来の精神活動に起源を発している。しかし、人間理性のあり方をめぐって思索を深めた近代的思惟の構造は、神を対極におくその二元構図だけではとうてい説明しきれない。さらに重要であった流れは、ルネッサンス以後の近代科学・近代制度の発展と並行的にたえず意識されつづけてきた、人間をそもそも微小な自然環境的存在としてとらえ、時代に制約されざるをえない人間と人間社会の歩みを、その制約をも視界にいれて見直していこうとする関心であった。その精神は、人間とその文化を歴史的視野で振り返るという特徴にも貫かれている。つまり時代の支配的文化さえも、ある環境によって作り出された可変的規範と見做す立場から、支配的な「理性」をたえず歴史の文脈のもとにおき、客体化してみようとするその姿勢は、つまるところ近代の人間と人間文化の有り様をより複合的に、慎ましやかにみる態度であったといつてよい。

18世紀啓蒙思想期以来の人文科学は、その意味の人間理性に対して主知的でありつづけようとする態度と、「理性そのもの」までも批判対象として人間を多様に位置づけようとする姿勢の葛藤のなかから、複雑な展開を示してきた。私が指針としたい「合理的な態度」とは、そうした近代的思惟の底流に流れた努力を引き継ぎ、人間の営みを矛盾と葛藤を孕む複合的なものと理解し、一元的理性を排し矛盾にこそ目配りしながら全体の営みを批判的にとらえていこうとする自由な精神のあり方としておきたい。

かりに小括しておこう。人文科学をさしあたり学問として定義づけられ

ば、それは、人間とはなにか、その存在の意味を根本から考えつくす分野ということになる。しかし、そのように定義される人文科学のあえて今日の基礎を突き詰めていえば、以上に述べた近代以来の、ときに傲慢ともなる人間理性を肯定ばかりか懐疑的にもみていくことのできる、つまるところ人間とその文化を広く客体化し、さらには歴史的な文脈のなかで批判的にみていく態度であろう。考える主体である自己をも折に触れて客体化する、そのような内省的努力を基礎にすえる学問においては、人間の本質的な限界性あるいは境界性を認め、その人間を包むものとしてさらに多様な「多元的」世界を自然世界に認める態度も、一つの視座として組み込まれてくるであろう。「多元性へのまなざし」と呼んでよいその視角こそ、人と人との関係ばかりか、人間と自然との葛藤までが語られる今日のグローバル化した世界において、人文科学が改めて評価してよい、共生に向けての自由な態度であるように感じられる。

本巻は、京都大学文学研究科が平成14年度11月から開始し18年度末まで五年間のものとして実施する、21世紀COEプログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」の第1回報告書として刊行するものである。

本プログラムの細部については、京都大学文学研究科ホームページにおいて、研究の目標、活動概要さらには成果を逐次公開しており、さらに研究班ごとにはニューズレターを発行することで活動情報の公開と伝達を図っている。ただ、それらの随時情報とは別に、本プログラムでは、計画の実施概要、さらに成果を「人文知の新たな総合に向けて」と題する報告書として順次公刊する予定である。本書は、その第1巻として、プログラムの目標を提示する共に、現在スタートから9ヶ月がたった計画の現状を記録しようとしている。

平成14年11月以降、京都大学文学研究科においては本プログラムのもと、多くの計画が実施されている。そのすべてを網羅できないが、本報告書の第一部は、まずプログラムの全体目標と現在実施中の13の研究班の配置を俯瞰する一文とした。第二部は、プログラムの初期段階という現状を踏まえて、3名の研究者が、「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」の意図を各自の立場で小論している。第三部には、プログラムに参加している19名の若手研究者（COE研究員）のうち、3名

の研究内容を紹介するエッセイを載せた。本計画が、教育上の拠点形成をも重要な目標としていることを紹介する意図である。第四部では、現在活動中の13の研究班別に、研究班のそれぞれのテーマ、目的を記した上で、平成14年11月以降15年7月初めまでの活動状況を、研究会日程ならびに研究報告の概要にそって整理している。報告書としての本巻の中心部分である。最後に、本プログラムに関わって実施した事業および個別の成果等については、結び（第五部）の彙報においてジャンルごとに一覧とした。

小文を次のように結ぼう。すでに私は、学ぶことの意味を論じる文脈で人文科学が現代世界に向き合う意義について言及した。かりに、上記した「合理的な態度」を前提として、グローバル化時代と呼ばれる21世紀初めの人文科学の課題を考えるとすれば、どのような問題がそこに具体的に浮上するのか。かつてもたえずそうであったように、学ぶ行為は、われわれ自身の抱える現状から重要な問題をみだしつつ進まざるを得ない。

ちなみに、2001年におこった9・11事件と、その後の世界戦争にも似た現実はいわゆる何を語るのか。9・11事件が有無もいわさぬ暴力として、徹底した不条理そのものであったとすれば、その後の戦争もまた、異常なまでの不合理さに満ちている。ただ、そうした仕組まれたテロ・暴力や、それに対抗する世界規模の戦争が孕むすさまじい殺傷をあえて取り上げずとも、地球上の人類社会には異様な殺戮、不条理な死の現実があふれてもいる。内戦や貧困が原因となって何千人もの餓死者がおこる状況が前者であるとすれば、先進社会といわれる地域でも、ストレスによる自殺、さらには交通事故・医療過誤などに端を発した不条理な死が突然に様々な人を襲う。生と死の界域がかほどに薄くなりつつある現実を、どのように受け止めたらよいか。間違いなくその界域の劣化は、死に対する既存概念の揺らぎとともに、われわれに改めて生きること、さらには生きるものの意義づけを問う。人間が死を免れない、それ故に生きる存在である以上、人間にとって「生きるということ」、あるいは「生きるもの」の権利や意義をどのように捉えるのか。人文科学は、「生きる」という問題に最も敏感な学問であらざるを得ない。

気になる事実はそればかりではない。自然科学は、われわれの既存の

社会制御という判断領域からすでに明確に決別し、ひたすら未知の世界に自律的に進み新たな領域を独自に作り出しつつあるように見える。20世紀、核技術開発にまで拡大した物理学、化学がそのさえたる例であったが、今日ではその先端はさらに多様化している。たとえば生殖医療の進展、あるいは遺伝子治療の可能性が科学的成果を積み上げる一方で、それらが、個という既成の人間概念に及ぼしている衝撃は大きい。人間そのものが科学の手によって操作されかねないところまで進むとき、人間とは何か、あるいは個人とは何かという問いが、はたしてかつてのままでありえるのか。あえていえば生命体としての人間の本質に関わる変化さえ、現代ははらむ。人文科学にとってそれも大きな課題であろう。

さらに、生と死に関わる問題とは別に、ごく身近な事象にそっていても、60億人にまでふくれあがった人類の経済・社会活動が地球環境や人間社会の生活様式に、とてつもない不協和や傷痕をすでに及ぼしている。各地において開発によって引き起こされた既存生活様式の破壊、さらに異なる文化や宗教がぶつかりあう様子は、繰り返される戦争や暴力、さらには飽食の横にはびこる貧困とともに、21世紀初めに入りますますあふれ出ようとしている。現代の最も大きな問題は、そうした現実が、地球上の特定地域にとどまらないことでもあろう。資本や人の流れの広域化、さらには情報のグローバル化は、あらゆる問題をすさまじい勢いで地球上に一般化し、また流動化させていく。このようなグローバル化がもたらすかつてない混沌を前にわれわれは、改めて人間の生きることの意味、さらには文化の意味を考えざるを得ない。

つまるところ、今日の人文科学もまた、本質的に様々な矛盾を含む人間の営みが引き起こす問題の複雑さ、さらにはその知的有限性について、歴史的な深い内省から出発せざるを得ないであろう。われわれの既存知識を省み、多様な人びとの営みや文化の役割を歴史的に根元にまでさかのぼって考え抜くことで、あえていえば人間を含んだ「自然」という世界の多元性を確認することから、現代世界がはらむ対立や矛盾の意味を改めて批判的にとらえ直すことができるのではないか。試みの展望は決して開かれているわけではない。しかし、不透明な未来であれば、それに向けて試行錯誤する実験的努力こそ、人文科学が進むべき道としてふさわしい。本プログラムの総合テーマを「グローバル化時代の多元

的人文学の拠点形成」とし、「多元的」世界の解明を共通の目標とした
所以である。